



# 慶應言語学 コロキウム

慶應義塾大学言語文化研究所  
The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies

## 普遍文法における パラメターの諸問題

講師：小畑 美貴 氏（法政大学 准教授）  
前田 雅子 氏（九州工業大学 准教授）

〔日時〕 2018年11月3日(土)・4日(日) 13:00-18:30

〔会場〕 慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

\*参加費無料・事前申込不要（会場にて参加者カードへの記入が必要となります）

普遍文法は全ての言語に共通する「原理」と個別言語ごとに異なる「パラメター」により構成されているという考えは、短期間での言語獲得と言語の多様性が説明可能であるという点で、広く支持されてきた。その一方で、パラメターの仮説には再考されるべき多くの問題が残っていることも指摘されている。2日間にわたる本コロキウムでは、*Linguistic Analysis 41: Special Issues on Parameters*に掲載されている論文を数点取り上げ、パラメターを取り巻く諸問題に関して議論を行う。特に、「パラメターはそもそも必要なのか」というマクロな視点からの間に端を発し、「必要である」なら、それはどのように構成されているのか、「不要である」なら、どのような代案が考えられるのか、具体的な言語現象に基づく経験的側面から、及び(主に)ミニマリストプログラムに基づく理論的側面から議論を行う。

### 第1部 パラメターは不要である

本発表では、まず Chomsky による論文に基づき、生成文法における言語の普遍性と多様性を捉えるシステムの変遷を紹介すると同時に、言語にのみ固有のパラメターを仮定することから生じる様々な理論的及び経験的問題点を考察する。特に、Duguine, Irurtzun and Boeckx に基づきパラメターシステムが抱える経験的問題点を明らかにする。更に、Epstein, Obata and Seely に基づき(パラメターの値を選択することにより個別言語の多様なアウトプットを生成するのではなく)統語操作の適用順序(rule-ordering)の多様性により、多様なアウトプットが生成可能になるという主張を紹介し、その理論的、経験的帰結を考察する。

### 第2部 パラメターは必要である

本発表では、Rizzi と Cinque の論文に焦点を当て、パラメターを仮定することにより言語間変異がどのように説明されるかを考察する。Rizzi は、パラメターは機能範疇における形態統語素性であると仮定し、それらが Merge、Move、Spell-out をどのように駆動するかにより言語間変異が生じると主張する。また、Cinque は、一般にマクロパラメターとみなされる主要部パラメターをマイクロパラメターにより分析する。この分析のもとでは、基底の階層構造に言語間変異はなく、語順の違いは移動と pied-piping の特性の違いに還元される。本発表では、このようなパラメターを機能範疇特性に還元する分析を概観した後、その理論的、経験的帰結を考察する。